

【大会報告】

第 39 回日本基礎老化学会大会報告

石井 直明

東海大学医学部 基礎医学系 分子生命科学領域

本年 5 月 27 日、28 日の二日間にわたり神奈川県伊勢原市民文化会館において第 39 回日本基礎老化学会大会を開催しました。伊勢原には新宿から小田急線で 1 時間以上かかり、一番近い新幹線の小田原駅はのぞみが停車しないことから、参加するには便利とは言えない場所にありますので、最初は東京か横浜での開催を考えました。しかし横浜は去年の開催地であり、東京も本学会のシンポジウムや老年学会で頻繁に開催されていますので、たまには普段あまり訪れることがない場所での開催も新鮮ではと、私の所属する医学部がある伊勢原市に決めました。医学部に講堂が新設され、そこを使いたかったのですが、今年カリキュラム改訂があり、準備を始めた時点では利用できるか分からなかったため、隣接する文化会館を利用しました。

伊勢原市には丹沢大山国定公園があり、その入り口にあたる標高 1252m の大山は古くから山岳信仰の山として親しまれてきました。狂言・落語の「六人僧」は江戸時代の「大山詣り」を題材にしたものです。大山は別名を「阿夫利(あふり)山」、「雨降(あふ)り山」ともいい、雨乞いの神として農民の信仰を集めたそうです。晴れた日には山頂から東京湾から横浜市、三浦半島、鎌倉・湘南海岸、伊豆半島まで一望できます。伊勢原市は別名、「果物の里」と呼ばれ、イチゴ、ブドウ、梨の農園がたくさんあり、風光明媚、農産物が豊かな土地として知られています。隣の厚木市には連合国軍最高司令官だったマッカーサーが戦後降り立った米軍の厚木基地があります。学会前日の理事会後の夕食会はマッカーサー夫妻が使っていたという車が置いてあり、ジャズの生演奏が聴ける

レストラン「マッカーサーギャレージ」で行いました。

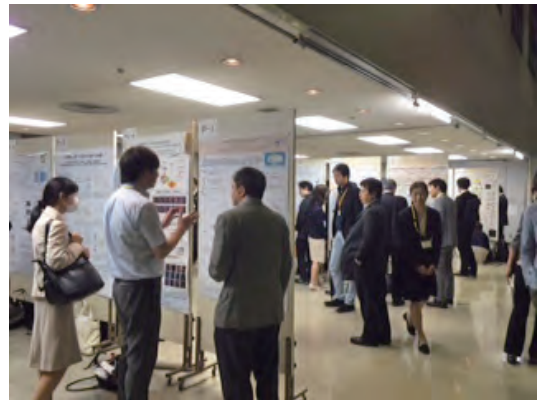
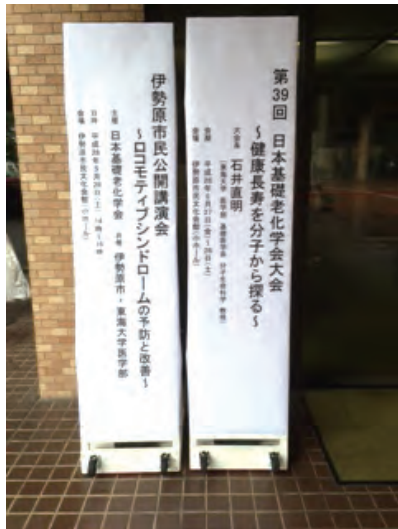
伊勢原のような辺鄙な場所に来てくれるのかと危惧しましたが、東海大学関係者を除き 113 名の方々に参加していただき、演題も 37 題と例年と変わらない数の申し込みがありました。

今回の学会のタイトルを「健康長寿を分子から探る」とし、特別講演には日本の百寿者研究の第一人者である慶應義塾大学医学部百寿総合研究センターの広瀬信義先生に「ヒトの長寿を遺伝子から探る：スーパーセンテナリアン研究の展望」というタイトルでお話いただきました。百寿者の遺伝子から炎症や免疫、テロメアなどとの関係など多岐に亘る解析の結果と、105 歳以上のスーパーセンテナリアン(超百寿者)の研究の展望について、広瀬先生でなければ語れない貴重な講演をしていただきました。

基礎老化学の進歩により、老化にシグナル伝達経路を介する代謝が深く関わっていることが明白になってきましたので、シンポジウムでは東海大学医学部基盤診療系健康管理学教授で附属病院健診センター長であり、本大会副会長の西崎泰弘先生には臨床医の立場から、我々が医学部附属東京病院で展開している抗加齢ドック受診者の血液のデータ解析の話、「人間ドックによる老化の推量と介入：抗加齢ドック 10 年間の取り組み」を、筑波大学生命領域学際研究センターの深水昭吉先生には基礎生命科学者の立場から線虫を使った食事制限による代謝、特にアミノ酸代謝の加齢変化の話、「寿命を動かす代謝の仕組み」をしていただきました。

一般演題講演は老化特定分子 4 題、老化関連ストレス





分子6題、神経老化関連分子5題、老関連階層性生体分子5題の20題の他に、1日目夕方のポスター発表26題の中の奨励賞候補者17名に対してポスター発表の前に5分間の講演の時間を設けました。これには、ポスターの発表時間が短いという理由もありましたが、全参加者の前で口頭発表することが若手の貴重な経験・訓練になることと、事前に発表内容を聴衆や奨励賞の審査員に理解してもらうことで、ポスター会場でもより活発な議論をするという狙いがありました。この奨励賞には、橋本理尋さん（中部大学生命健康科学部生命医科学科）「脂肪組織特異的CREG1-Tgマウスによる褐色脂肪化生活習慣改善の検討」、中川久子さん（北海道大学遺伝子病制御研究所）「Caenorhabditis elegansの寿命延長効果を示すLactobacillus gasseri SBT2055の作用メカニズム」、藤田泰典さん（東京都健康長寿医療センター老化機構研究チーム）「地域在住高齢者の血中GDF-15と負のアウトカムとの関連解析」が選ばれました。

今回の大会で感じたのは、研究の質が高くなったことと、若手の目覚ましい成長、そして、討論時間を長めに取ったことでしっかりとした議論がされたことでした。一番嬉しかったのは、「昔の基礎老化学会の大会会場にいるような雰囲気の活気溢れた大会だった」と参加者から声をかけていただいたことでした。

大会1日目の昼には東海大学のブランド戦略事業の支援により我々が考えた「抗加齢ヘルシー弁当」を参加者全員に試食していただきました。量的に男性には少し物足りなかったかもしれませんが、味は好評でした。1日目の夜は文化会館隣の市役所の食堂において懇親会をおこないました。夜7時半開始にも関わらず60名の方に参加していただき、和やかな雰囲気の会を持つことができました。

2日目の午前の一般演題講演と奨励賞受賞式・総会に続き、午後からは「ロコモティブシンドロームの予防と改善」というタイトルで市民公開講演会を開催し、市民70名が参加してくれました。東海大学体育学部教授

で整形外科医の中村豊先生にはロコモティブシンドロームの解説と神奈川県大磯町で展開している健康事業について、医学部の客員研究員で小関アスリートバランス研究所の小関勲所長にはヒモを使った健康トレーニング法（ヒモトレ）を参加者に体験してもらいました。高山松太郎伊勢原市長にご挨拶をお願いしたのですが、奥様も同伴で来られ、最後まで残って熱心にヒモトレをおこなっていただきました。

基礎老化学会がまだ研究会の時代から毎年欠かさず参加し、この学会に育てられたと思っておりますが、現役最後の年に大会長を務めさせていただく機会を与えていただき、本学会の皆さまに感謝いたします。また大会の参加登録管理や開催準備をしてくれた秘書の辛島由希子さん、準備・運営に尽力してくれた技術員の安田佳代さん、企画からプログラム編成、開催に至るまでほとんどの業務に携わり、討論時間を長く取る、奨励賞の候補者は口頭発表とポスター発表をおこなうなどのアイデアを出してくれた石井恭正講師という優秀な研究室のスタッフがいてくれたからこそ開催できた大会であったことを記したいと思います。大会開催に協力・支援をいただきました東海大学や医学部同窓会、企業の関係者の方々にも感謝申し上げます。

基礎老化学が老年医学や抗加齢医学の発展に大きな役割を果たし、今後ますます重要で、世の中に必要な学問になっていくと思いますので、日本基礎老化学会のさらなる発展をお祈りします。